

北米インディアンの生活 (7)

—23部族の伝承と習慣—

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著
神 徳 昭 甫 訳

VI メキシコの部族

VI-3 ホロン・チャンは如何にして^{ザ・トゥルー・マン}国^王¹⁾となったか？

十七歳の若者が、この都市一番の高いピラミッドの頂上に座って、周囲の寺院や宮殿、その向こうに続く民衆の低い萱葺き屋根、さらには目路の及ぶ限り、どの方向にも延び拡がっている草原を見下ろして、浮かぬ顔つきで物思いに耽っていた。

^{サッシュュライク}腰布に似た綿布を身に纏っただけで裸体に近いが、帯の片方の端は、体の前の両足の合い間に、もう一方の端も同様に、背後の両足の間に垂らすように巻き、両端とも緑の羽毛の刺繍が丹念に施してあった。美しい翡翠に彫刻したペンダントが首に掛かっていた。身長は、5フィート5インチ（1メートル65センチ）、ほっそりしてしなやかな体つきで、手足は小さ目だが、膚は見た目も快い、暖色系の黄金色に近い褐色であった。瞳は黒く細く、幾分斜視気味だった。長いワシ鼻が一直線に平らな額に続いている。これは幼いころからまさにこの扁平な印象——この部族ではそれは美と卓越の印象を与えた——を確保するため、彼の頭が二枚の板に挟まれていたからである。髪は黒く、艶があって長い。それは編まれて頭の周囲に巻かれ、うち一撚りだけをお下げにして後ろに垂らしてある。

1) 原文（英文）は、“the True Man of his people”で、以下本文に頻出する語句である。直訳すれば、「部族の真の人」となろうが、マヤ民族の各部族はそれぞれ独立の政体であるため、敢えて「国王」、「王」の訳語を使用した。しかし支配者としてのその性格は、政教分離した西欧近代の‘king’とは異なり、祭祀性の強い点において、「シャーマン王」といってもよいほどである。なお、原著の巻末にある「付録」によれば、“True Man”の原語に当たる *halach vinic* は、世襲制で最高位の首長に与えられた称号であった、という。

時は紀元531年の8月のこと、場所は古代マヤ帝国²⁾最大の都市ティカル³⁾である。そしてこの若者こそ、彼の視界を限る不毛の大草原^{サヴァンナ}の向こうに存在するはずの群小の属国のみならず、足下に拮がるこの素晴らしい都市の、来るべき支配者にほかならなかった。

彼の不満は今に始まったものではなかったし、しかも自分で変えることのできない、一つの状況から発していた。少年の父、アフメカト・チャン、すなわちティカルの前国王^{トウルー・マン}は、たった一人生き残った息子であり後継者である、この少年ホロン・チャンを遺して二年前に薨去した。彼が幼少の間、国政は父方の叔父であり、イツァムナ⁴⁾神を祀る高僧アフクウイトク・チャンを摂政に、またマヤの神々の長である、このイツァムナ神の強力な神官たちに補佐されて遂行されたのであった。しかし今や民衆は、ホロン・チャンの最高議会における叙任式をやかましく要求しており、その結果、国王のみが執行できる至高の儀式の数々が、もう一度舉行されることになり、実際、アフクウイトクはいま、この甥に国権を移譲するため、五年の猶予期間が終るのを待ち望んでいる状況であったのである。神々の王であるイツァムナは、彼に仕える神官たちの口を通して、この期間の最終日に盛大な式典を執り行うように指示し、こうしてそのための準備がしばらく前から続けられていたのである。

ところでこの少年には、約束された栄光の地位に対してほとんど関心がなかった。彼には元来放浪癖があったし、広々した戸外で育ち、常に森の持つ堅牢さと寂寥を愛したからで、国王よりも、森の木々を蒐める木樵やトウモロコシを植える農夫のような慎ましい境涯に適していたからであった。

2) 古代マヤ帝国 the Old Maya Empire. メソアメリカ年代分類法によれば、コルテス(1485-1547)がアステカ王国を侵略した1519年以降を境に、それ以前を古典期(the Classic)と呼ぶが、古代マヤ帝国とは、この期間の中でも特に紀元300年から900年にかけて熱帯のマヤ低地において、パレンケ、ティカル、ヤシュチラン、さらには、高地のカミナルフュー、コパンなどマヤ族の築いた王国を指す。

3) ティカル Tikal. 「グアテマラのベテン地方にある低地マヤ最大の都市遺跡。棟飾りのある神殿とそれを支える高いピラミッド、持送り式アーチでつくられた宮殿、建造物複合体群を結ぶ大通り、しつこい彫像による建築装飾、石碑の建立など、マヤ古典期の初めから中心的存在として栄えたが、900年ころ、他の低地マヤ諸都市と同様放棄される。またテオティワカンの強い影響も重要な特徴の一つである」(大井邦明「ティカル」『世界大百科事典』平凡社、1990年)。遺構の全体についてその「中心部は16平方キロを占め、周囲の沼地から約50メートルの高さに断続して立つ大地の上に、ピラミッド状神殿、『アクロポリス』とよばれる基壇の上の建物群、石碑などが建ち並ぶ。紀元前600年ごろから居住の形跡があるが、大祭祀センターとして確立するのは紀元後292年以降である。もっとも古い石碑の年代は紀元後292年であり、マヤ文字の解読により、376年から768年にいたる王朝の統治者の歴史が解明されている。…830年ごろから人口が減少し始めやがて放棄された」(増田義郎「ティカル」『日本大百科全書』小学館、1995年)。以上の記述からも、この物語の時代設定は、後述するように紀元531年ではなく、790年とみる方が、妥当であろう。

4) イツァムナ Itzamna. 「天上、昼、夜などの領域を司り、他の神々をも支配するマヤ神話における主神。マヤの美術工芸品では、しばしば大きな鼻を持ち、歯の欠けた快活な老人として造型されている。マヤ神話では、言語、火、農耕(トウモロコシの栽培)、暦、医療などの文明の基礎を与えた文化英雄として登場する。また、土地の区画整理法、祭儀の形式を定めた」(John M. Wickerman Vol.3, 4, 39)とも言われる。

自国の領土より遙か北方に広大で素晴らしく肥沃な土地があるという前世紀の大発見が、彼の想像力に火を点けて、人民をこの新しい約束の土地——そこは神々が常に笑みを絶やさず、トウモロコシは、豊かな実りをもたらす、と言われていた——に導いていくことを熱望していたのだ。それに、これらの希望には満更根拠がないわけでもなかった。彼にはもともとチャク・チャンという兄がいて、支配者として父の跡を継ぐはずだったのだが、あるとき合同の鹿狩りの最中、咬まれたものは誰も生き返ったためしのない、恐ろしい毒蛇ウエルパチに咬まれて命を落とし、ホロン・チャンは、こうして王位後継者の筆頭候補にされてしまったのである。かくして至高の地位そのものが要求する過酷な献身と相並んで、彼の全時間と議会の全精力を費やすほどの複雑な儀式が、彼に残された僅かな個人的自由を根こそぎ奪ってしまう、その時がいよいよやってきた。

この時期のマヤ民族は、マヤの暦法に従えば、18カトゥンの終わり⁵⁾に位置していたが、それは、彼らの力の絶頂期であると同時に、衰退期の始まりでもあったのだ。もはや数世代にわたって、かつてはその都市、街区、村落を圍繞していた広大な森林が、原始的な開墾法によって次第に樹木も疎らな草原へと姿を変えつつあったのである。この開墾法とは、一月、二月の雨期の終わりにかなりの面積の森林を伐採し、三月、四月の乾期の終わりに乾燥した木や灌木類を焼き払う、さらに五月の最初の雨のあと、種蒔きを行うことから成っていた。翌年、新しい森林を求めて同じ手順が繰り返されるのだが、これは経験上、同じトウモロコシ畑を二年続けて使えば、次の年は作物の収穫が半分に減るということがわかっていたために、新たな若木が育ってくるまで数年間は最初の土地に種を蒔くわけにはいかなかったからである。この農法にはしかし、二つの重大な欠陥があった。土地の大部分をこうして常に遊ばせておくのみでなく、森の成長力が当初の状態にまで回復できない時期がついにやってきていたのだ。代わりに多年草のみが生えて、次第に土地全体が草地へと化していた。これらの草原をマヤ人は、耕作する術を知らなかった。というのは、彼らは土を掘り返す道具を持たず、したがってトウモロコシを植えるために適した土地を見つけるためには、ますます家から遠く離れた場所を求めて行かざるを得なかったのである。しかしこの一時凌ぎの方法にも遂に限界がやってきた。トウモロコシ畑に行くには、市街地から二、三日もかかり、民衆は彼らの生存条件がこれほど耐え難いものになるまで放置した神々に、また草原を耕作させることも出来ず、その気もない神々に対してはもはや信仰心を失い始めていたのである。

生活が楽で、収穫の神、ユム・カアシュ⁶⁾が常にきわめて好意的と言われている、北のユカ

5) 18カトゥンの終わり the close of Katin18. 注13参照。

6) ユム・カアシュ Yum Kax. 19世紀後半のマヤ研究者の一人パウル・シェルハスは「多様なマヤの神々を整理し、AからPまでのアルファベット文字をつけて分類し」ている。その一例として「トウモロコシの神Eは、現代の文献ではしばしば『ユム・カアシュ』と呼ばれている」が、これは「『生い茂った灌木の王』という意味」(メアリ・ミラー/カウル・タウベ 152-156)で、ユムは「父」・「王」、カアシュは「森」を示す語である。

タン半島に、これまで熱烈な眼差しを向けたのは、**ホロン・チャン**ひとりではなかった。多くの農夫コーン・プランターが既に家族とともに、北の森林を抜けてこの新しい土地へと逃げ出していた、それを禁ずる厳しい法律にも拘わらず、である。神官も貴族階級もともにこの逃散ちようさんに強く反対し、この国の崩壊を防ぐために法律のみならず、神託が抛り処にされたのである。しかし神々の怒りを招く、という脅し文句も、また時間的には遥かに迅速な人間界の処罰にも拘わらず——というのもこの犯罪に対して極刑が適用された例が一度ならずあったからだ——民衆の流れは着実に「旧帝国」を出て、北に向かい、**ユカタン**半島へと注いでいたからである。例えば、聖なる都市、**パレンケ**⁷⁾では、**イツァムナ**を祀る神官たちは、この神殿の畠を耕すのに必要な数の小作人サーヴァントを集めることができないという話が囁かれた。この噂は公式に認められることはなかったが、しかしますます多くの人々が、彼らの国土は呪われている、民族救済の唯一の手段は、北への「大脱出」ジェネラル・エクスodusしかない、ということを感じるに到ったのである。実際、草地を開墾する何らかの手段が講じられなければ、民衆はどこかに移住しなければ餓死してしまうことは誰の目にも明らかだった。

この間、神官たちはあらゆる機会を利用して民衆の更なる信心と宗教的熱情を煽るための説教をした。人々が供物を怠るので、神々は激怒している。供犠を二倍にしなければならない、というわけだった。最近では、新王の戴冠式が近づくにつれて、この行事によってかつてない繁栄と豊かな暮らしを約束する新時代が招来されるであろう、という占いや託宣が出ていた。この少年は、収穫神**ユム・カアシュ**が守護神である幸運の日に生まれた、だから彼の兄の死は決して悲劇なのではなく、**ユム・カアシュ**によって選ばれたものが国政を司り、人民を治めるようにと配慮された神々の、人事における直接の介入にほかならぬ、とこのように神官たちは喧伝したのである。かく収穫の神が宥和されれば、繁栄は再びこの地にもたらされるであろう。と、このように少年の統治に対して高い希望が寄せられていたのだが、古き良き時代であれば、**ホロン・チャン**は叔父を支持して、王権を放棄することも許されたであろうに、今や時代はあまりにも苦難に満ち、未来はあまりにも不確実なので、敢えて収穫の神のご機嫌を損ねることだけは、何としても避けなければならない。

ピラミッド寺院の頂上に腰を下ろして若者は、この都市の輝く白壁に長い影が落ちるのを眺めながら、以上のことを考えていたのである。

溜息を吐いて漸く彼は立ち上がった。**ホロン・チャン**が**イツァムナ**の聖堂に入り、犠牲を捧げようとしてそちらの方向へ向かおうとしたとき、太陽は遠い草原の彼方に没しようとしていた。白衣を纏った老神官が一人、この聖堂を守って外側の廊下うずくまに蹲踞うずくまっていたが、身分上いつ

7) パレンケ Palenque. ユカタン半島南部ラカンドン地方、メキシコ湾に注ぐウスマシンタ川中流にある都市。〈碑銘の神殿〉と呼ばれる巨大ピラミッドなど、古代マヤ文明の神殿建築群の遺跡で有名。ティカル、ヤシュチランなどと同じく、メソアメリカの年代分類上で、古典期後期と呼ばれる7～8世紀にかけて栄えた。

でも出入りする権利を持つこの若者が、精巧な刺繍を施した綿の緞帳を押し退けて、中に入ろうとしたときも、瞑想を中断してちょっと顔を挙げただけであった。

聖域は小暗く、わずかに香を燃やす香炉と、細長い部屋の両端に一つずつある8インチ（20センチ）四方の小窓から、ときおり発する束の間の明かりが照らすに過ぎなかった。背後で緞帳が元通り閉じると、少年は扉の側に置かれた大皿まで身を屈めたまま進み、コーパルの樹脂から採られた儀式用の鮮やかな孔雀青^{ビーコック・ブルー}に塗られた香料の塊をそこから選びだした。この薄暗がりの中に、8フィート（2メートル40センチ）ほどの木彫りの像が石の台座の上に立っていたが、背後の壁に背をもたせかけてあるのが見分けられた。高い鷲鼻と歯のない下顎、それに明滅する光をキラリと跳ね返している、磨きたてられた二個の翡翠⁸⁾の玉の、突き刺すほどに鋭い眼球を備えた老人の像である。頭は羽毛の蛇⁹⁾に似せて彫られた複雑な冠りもの、全身は、赤、青、黄、緑、白、黒で塗られた極めて派手なお姿だ。首飾り、胸のペンダント、イヤール・ブラグ^{イヤール・ブラグ}、耳栓、足首の飾り、それと大きく、豪華な翡翠の腕輪が、この像を飾る衣装のすべてである。ホロン・チャンは、香炉の上に供え物を置くと、神像の前に平伏した。イツァムナ神が後継者の道から兄を外して、自分のために選んでくれた道を辿ることにたとえ、どれほど気が進まなくとも、その双肩にのしかかった責任を回避しようという考えは彼の頭に思い浮かばなかった。彼は四百年に亘ってこの国ティカルを支配してきた著名な古い家の出身であった。初めてこの部族を現在の土地に導いた遠い祖先から、彼の父に至るまで、すべてが危機や困難に

8) 翡翠 jade. メソアメリカの人々は金銀以上に翡翠を尊んだ。「メソアメリカの世界で最も高貴なものはたいてい青緑色であり（ケツァルの羽毛、トウモロコシの葉、水、草木）、同じ色の翡翠は高貴の象徴であり、時には生命そのものとも同一視された。それゆえ彫像に心臓としてはめこまれたりした。またメソアメリカで最も硬い石であった翡翠は永遠をもあらわし、マヤ貴族が死ぬと、冥界に入るため―死後の世界の生活費として、あるいは生命の再生のしるしとして―遺体の口に翡翠の玉を入れる習わしがあった」（メアリ・ミラー／カール・タウベ13-4, 266）。

9) 羽毛の蛇 the Plumed Serpent. マヤ語でククルカン。ナワトル語では、ケツァルコアトル Quetzalcoatl. 「古代メソアメリカ屈指の大神。ケツァルコアトルはヘビと鳥が奇跡の合体をした神である。後古典期ナワトル語のケツァルコワトルという名は、エメラルドグリーン⁹⁾の羽毛をもつ鳥であるケツァルとヘビをあらわすナワトル語『コワトル』coatlを合わせたものである。つまり、この名前は『ケツァルヘビ』と解釈できる」（メアリ・ミラー／カール・タウベ119-20）。この神は農業、技工など文化の神として信仰されたが、「16世紀メキシコのエスノヒストリーの記録では、古代の神ケツァルコワトルが歴史上の人物セ・アカトル・トピルツィン・ケツァルコワトル（伝説的な町トラン―現在のトゥーラの王）と混同されている。アステカの伝説では、セ・アカトル・トピルツィン・ケツァルコワトルはトランを出発して東の赤い土地をめざした。…ユカタンの文書ではククルカンはトゥーラとよく似た町チチェン・イツァーに來たとされている。チチェン・イツァーには、緑の羽毛におおわれたヘビを背後にもちマスクをつけた人物が描かれているが、これがその歴史上の人物ククルカンではないかとみられている。しかし、歴史上の人物が死んだあとに神聖化されて同名の神になったとも考えられ、人間と神の境界線を定めるのは容易ではない」（メアリ・ミラー／カール・タウベ119-120）。いずれにせよ、「羽毛の蛇」の意匠は、メキシコ中央部のティオテワカンの「ケツァコワトルの神殿」や、チチェン・イツァーの「ククルカンのピラミッド」などでは建物の装飾として用いられているが、神殿の壁画としても、また人間の形をした彫像として描かれたものなども、各地で発見されている。

直面した際、責任を荷なうことを常とした勇敢な人々だったので、このチャン家最後の子として非常事態に臨んでは、彼らと同様に振る舞うことにおいて何ら異論を持たなかった。それゆえ少年はこの先待ち受けるさまざまな問題に対処すべき叡智を求めて、長く、かつ熱心に祈ったのであり、とりわけ民族の生存そのものを脅かしている、あの恐るべき農業上の問題を緩和すべき手段を捜し求めていたのである。

祈りを終えて、少年が聖堂を出ると、外側の廊下で警護に当たっていた老僧に軽く会釈し、それからピラミッドの階段を降りようとした。熱帯地方特有の早い黄昏は、すでに溶けて夜の闇へと移っていた。頭上には雲一つない空に星がいくつか瞬いている。眼下には、点々とあちこちに小さく輝く赤い火が——今や三日後に迫ったホロン・チャンの就任式という大式典の準備に暇がない民人たちの煮炊きする火だ——闇を飾っている。

足下に注意しながら険しい階段を降りたホロン・チャンは、地上の大きな石畳を敷き詰めた広場を渡って、石造りの細長い家敷——彼の家族は数世代に亘ってこの家を住居としてきた——に入った。横200フィート（6メートル）、縦に部屋が三つ並ぶ一階建ての家屋である。これらの部屋は、どれもみなマヤ建築特有の弓型天井アーチド・シーリングを持っていたが、狭くて長く、戸口の外のみに灯りが点り、床上6フィートの高さに小さい正方形の窓が付いていた。この邸宅で最も大きい部屋は、縦6フィート、横10フィート、高さ18フィートもある部屋で、中央の扉から直接入ることができた。部屋の片隅には、その上に木製の椅子が置かれている石壇が設けられている。この座席は背もたれがなく、両肘がジャガー¹⁰⁾の頭の形に彫られている。頭上には、緑の羽飾りからなる天蓋があった。この部屋は、この国の会議室なのであった。ここを通り抜け、その奥にある居住区域にホロン・チャンは入った。それから床に胡座をかくと、掌を打って奴隷を呼び、夕食の準備を言い付けた。程なくして奴隷は、トルティーアと黒豆の入った皿、カカオを成分とする芳香性の強い飲み物の鉢ボウルを持って戻ってきた。ホロン・チャンが叔父の居所を尋ねると、イツァムナの僧院にいるということだった。食後、水で口を漱ぎ——これは貴族として欠かせない習慣なのだ——自室に退いて柔らかな絹の掛布に覆われた寝台に横になり熟睡した。

明るく朝、早目に起床したホロン・チャンは、マホガニーの丸太を削り貫いた浴槽に浸った

10) ジャガー-jaguar. 「メソ・アメリカで最も恐れられ、また最も崇められた動物であるジャガー (*Panthera onca*) は宗教上非常に重要な役割をになっていた。人間と同様にジャガーは食物連鎖の頂点に立っていたため、人々は自らをジャガーと同一視した。夜行性のジャガーの目は、夜になると黄金に輝く丸い玉となる。…ジャガーの毛皮の最大の特徴ははっきりと目立つ黒い斑紋であり、希少な全身が黒いジャガーにも、よく見るとこの斑紋がある。ジャガーは熱帯雨林にのみ棲息するが、貢献品・交易品として、メキシコのあらゆる高地文明で珍重された。…支配者の力を誇示するため、首長や王はジャガーの毛皮を着、ジャガーのサンダルを履き、ジャガーの頭をかたどった頭飾りをつけ、ジャガーの歯のネックレスをした（中にはジャガーの歯の形に削った翡翠のネックレスもあった）。ジャガーの毛皮とクッションは、マットと並んで玉座についた王のシンボルであり、多くの石の玉座（とくにマヤのもの）がジャガーの形をしている。時には双頭のジャガーをかたどった玉座も見られる」（メアリ・ミラー/カール・タウベ163-4）。

あと、着替えを済ましたが、朝食は摂らなかった。これは叙任の期間は、断食をしなければならない規則があったからである。こんなふうにして彼は叔父に連れられてイツァムナ神の神官の集会に行くときを待っていた。祭りの導入部に当たる初日は、専ら知能検査で、イツァムナ神殿のすぐ後ろにある、やはり彼の名を取った僧院で、叔父やその他の神官たちの質問を受けることになっていた。神官の前では、地位の象徴たる一切の標章は身に付けずに現れるのが、その場に適っていた。従って間もなく叔父に先導されて出て行くときの彼の服装も、同じ年頃の少年なら誰でも着ているような、腰の周りに布を巻き、足には皮製の履物だけの簡素なものであった。

この長い一日の間に、ホロン・チャンが問われた多くの主題については、そのうちのごく僅かなものに触れておくだけにしよう。最初に叔父が、新年の祝宴——それはマヤの一年のうちで最も重要な儀式の一つなのだが——についての祭文を完全に吟唱するように言い付けられた。他の老賢人は日月星辰について、次の日蝕、月蝕はいつ起こるか、金星が宵の明星として現れるのはいつか、などを聞いた。植物繊維を漉いて作る数枚の白紙と顔料や毛筆が持ち込まれ、その日の日付を書くように言われ、それに関連した月の諸相を描いたあと、このそれぞれを司る神の名前を書くように命じられた。これらの質問をすべて見事に通過したので、老人たちは認可の代わりに軽く頷いた。次に鳥が一羽運ばれ、少年はこれを殺してその内臓から予兆されるものを読み取るように要求された。これにも文句のつけようもない堂々たる答えが返ってきたので、老僧たちはマヤの祭儀で最も重要なこの部分を彼が知悉していることに満足した。

最後に叔父が再び先頭きって、次のような人民の状況に関する鋭い質問を少年に浴びせた。この部族には何戸の家族があるか、平均的な一家族を支えるには一年間何人抱え¹¹⁾のトウモロコシが必要か。同盟を結ぶとしたらどの都市と行い、どこは避けるべきか。ユカタンへの脱走を防ぐのに一番よい方法は？ 収穫の神が草原にトウモロコシの育成を許すまで、脱走は妨げることも禁止することも不可能だろう、という答えに少数の老人が頭を振ったが、しかし大部分の神官はこの解答を賢明だと認める素振りを示した。これらの試問のあと、この僧院から再び宮殿へと戻ったあとで、チャンは叔父から、民衆の王たるに相応しい、十分な資格を彼が持っていると言われている旨を知らされた。

11) 原文は“how many man-roads of corn”。「アメリカに最初に人間が踏みこみ定着した経緯は定かではない。1万5千年前までには人類は水位の下がったベーリング海峡を渡ってアメリカに入っており、1万年前までにはメソアメリカ地域内に住みついていた。…おそらく大型動物を求めて移住したのであろう。…マンモスと人間の化石が発見されている。年代が下がると、人間は犬や七面鳥などの小動物を家畜化したが、大型の哺乳類が家畜として利用されることはなかった」し「メソアメリカでは新世界の他地域同様、日常生活において車輪が発達することはなかった。…これはおそらく荷車を引く家畜がいなかったためであろう。今日でもスペイン以前の時代と同じく、多くの地域で荷役の担い手は人間であり、額に負い革をかけ、重い荷を背負って運ぶ男女の姿を見ることができる」(メアリ・ミラー／カール・タウベ7-8, 14)。

二日目は、初日よりもはるかに厳しいものだった。この日は、多くの「お清め」の儀式に宛てられており、**ホロン・チャン**は蒸し風呂や ^{スエッティング} 瀉血 ^{ブラッド・レッシング} ¹²⁾ などによってすべての罪や邪心を払い浄められて、これから就こうとする高い地位に相応しい人間になるのだと考えられた。神官たちは彼を ^{テンブル・オブ・ピュリフィケーション} お清め寺院に導いた。この中の奥まった部屋で彼は衣服を脱ぎ、素裸のまま這うようにして低い石室に入った。この低い室内の後ろの方に水の入った盥^{たらい}が置かれていたが、ほどなく神官らは、木の葉で包まれ熱せられた、丸くて大きい5、6個の石を狭い戸口から差し渡した。この戸口が石板で閉じられると、**ホロン・チャン**はこの熱い丸石を一つずつ、盥のなかに入れ始めた。一つ落とすたびに、水温は上がり、間もなく蒸気が部屋の中に充満し始めた。ときどき石が持ち込まれて、少年はますます水を沸騰させていった。汗の玉が体中に吹き出てきて、窒息しそうになっても、なおも焼き石で水を湧かし続けいっそう温度を上昇させた。毛穴という毛穴から汗が滴り、彼は息も出来ずに喘いだ。もはや忍耐もこれまでと思えたときに石板が外された。蒸気が外へ溢れ出て、こうしてようやく息を吹き返したものの、熱と空腹のために彼は正に失神寸前の状態であったのだ。が、とにかく**清めの儀式**はこうして終わった。

次に与えられたのは強力な催吐剤で、これを飲んだあとの彼は、衰弱のために起き上がることさえできなかった。しかしこの民族特有の禁欲主義^{ストイシズム}を発揮して間もなく彼は、残酷かつ苦痛の次なる試練、瀉血に移るほどに体力を回復したのだった。

叔父に舌を出すように言い付けられ、その舌先に鋭い石の錐を突き刺された。待ちかまえた神官らは、小さな綿の球の数個分で血を吸い取り、これを彼の信仰の真剣さと清めのしるしとして**イツァムナ**神殿に持ち運んだ。日が暮れると、数インチごとに棘を含んだ細い植物繊維状の紐が、まだ傷口が開いているところから通されて残酷にも肉が切り裂かれ、この新たに取られた血は、少年の堅固な意志を改めて確認する証拠としてこの神さまに捧げられたのである。その晩、**ホロン・チャン**は完全な疲労困憊に達し身動き一つすることなく寝込んでしまったが、次の日の日没時に行われる実際の即位の儀式に先立つ、**イツァムナ**神殿での長い一日がかりの瞑想と祈祷の準備のために、もう明け方には目を覚ましていた。

この式典の準備は長い間続けられていた。新王の即位は、**マヤ**暦年上の一時代である、現在のこの五年間の終わりを記念するために建立された、大きな石^{ストーン・シャフト}の矢の除幕式と時期を同じくしなければならない旨を、**イツァムナ**が指示したと巷間噂された。一年も前に石から切り取ら

12) 瀉血 bleeding. 「人体から血を放出する行為は、メソアメリカ中で日常的に儀礼目的で行われていた。神々が自身の血を流して人類を創造したゆえに、人間の血はその返礼として差し出さる最も重要な供物であった。このような血の『負債』があるため、戦闘の捕虜は生きのまま連行され、その後に神々との契約を讃えるために、神殿や寺院で捕虜の血が流された。貴族は（おそらく貴族以外のすべての人も）自己供犠をおこなった」（メアリ・ミラー/カール・タウベ168-9）。

れたこの矢は、ティカルの大広場に運ばれそこに設置されて、除幕式の瞬間まで民衆の目から隠すようにと周囲には高い草の塀が張りめぐらされていたのである。

アフクイトクはこの国最大の天文学者と相談して、この奉納の儀式まで（そのときはまだ一年近く前だったが）に、最も早く起こる日蝕、月蝕はいつかを慎重に計算していた。その他の五年間の天文学上重要な現象を、この期間の主な事件の記録とともに蒐集していた。これらの出来事は、マヤ象形文字で、滲みを防ぐために白く細い石灰の糊を塗った数枚の紙——石の矢を彫刻する職人たちにとっては下絵を作るときにこれらは役立った——に描かれたもので、最後に就任式で豪華な衣装を身に纏うホロン・チャン自身の似姿が、この矢の表に苦心の末に彫り込まれたのである。今の五年、マヤ時代の9.18.000. の11アハウ18マックの終わり¹³⁾を画するこの記念碑が遂に完成し、時宜を得て、つまりはこの期間の最終日の日没の瞬間に、除幕式は行われることになっていたのである。これはもう、そうあらねばならなかった。なぜなら、マヤ民族にとって、時間は彼らが考え出したものであり、この時間は（ちょうど我々自身の天文学的時間のように）過ぎ行く単位として計測されたものであるからなのだが、従ってこの期間の最終日が最後に到達した——それは最終日の日没時である——そのときはじめて、この期間を記念する碑を正式に奉納することができるのである。

13) 9.18.000. の11アハウ18マック (9.18.000. 11 Ahu 18 Mac...). 9バクトゥン、18カトゥン、0トゥン、0ウイナル、0キン、11アハウ、18マックと読む。マヤの暦は一年を計測するのに260日の短暦と365日の長暦を組み合わせ、両暦の一致する周期である52年の時間的経過を重要視する循環暦の他に、歴史を記すためのもの、すなわち直線の時間を計測する長期暦があった。マヤ人は、暦のはじめの日、すなわち暦元を13.0.0.0. 0 4アハウ8ムルクと定めたが、これは西暦に直すと、紀元前3114年9月6日に相当する。この長期暦は、暦元から五つの単位を用いて数えられた。この五つの単位を日に直すと、次のようになる。バクトゥン=400年 (20×20×18×20日)、カトゥン=20年 (20×18×20日)、トゥン=年 (18×20日)、ウイナル=月 (20日)、キン=日 (1日)。これらの数字は棒 (5の数) と点 (1の単位)、輪 (0) によって示されたのである、これに従って本文に描かれたティカルの年代 (9.18.0.0.0) を日数に直すと、142万5千600日となる。これを現代の暦に直すと、紀元790年10月5日となる (従って原著に示された年代、紀元531年8月は誤りである)。この五桁の数字だけで歴史上の一日は決定できるわけであるが、石碑建立の日付けなど実際には、これに加えて循環暦の260日と365日暦上の日が付け添えられた。260日暦は、20の日と13の数字を組み合わせることができる。アハウは20番目の日。また、365日暦は、20日が1カ月となる月を18数えたのちに、ワヤップと呼ばれる5日間がついて、365日で1周期となる暦である。マックは、13番目の月に相当する。従って11アハウ、18マックとあるのは、260日暦の11アハウの日であり、365日暦の18マックの日であることを表しており、これらは必ず対になって長期暦に付せられた。なお、本文にある9.18.0.0.0.のように最後のトゥン、ウイナル、キンの三桁がゼロとなる年代は、マヤ人にとって非常に「区切りのいい、気持ちのいい日」であってこのような日が「石碑の奉納日に選」ばれたという。以上マヤ暦について詳細は、八杉佳穂「マヤ暦に太陽暦はあるか——暦の謎をめぐって——」『国際交流』99号 (2003年4月発行, PP. 80-84)、及び同『マヤ文字を解く』(中央公論, 昭和47年)に譲りたい。

しかし今や、既に述べたように多くの人々の希望や高い期待を一身に背負った、あの大祭の準備はすべて整った。ここ数日間で人々は群れをなしてティカルへ殺到している。随分と遠い村から老若男女が、この国の祭祀と政治の中心地を目指してやってきたのである。周囲の草原には藁葺きの掘立小屋が溢れ、トルティーヤとか、豆、カボチャ、サボテ¹⁴⁾、ココア、藪鳥の肉、瓢箪、陶器、菰、羽飾り、獣皮、綿製品、さらにはマヤ民族で最も珍重される翡翠の数珠やペンダントまでを物々交換する出店が至る所に出来上がった。

ティカルの大広場は、夜明けとともに未来の支配者が祈祷と瞑想のために、イツァムナ聖堂に先導されていく、そのときの姿を一目見たいという民衆で深夜から溢れんばかりになっていた。初日少年の学識はこの国の賢者によって試され、その肉体は清めの儀式によって罪と悪心を取り払われたし、さらに二日目、彼が抱く目的の堅固さと誠実さはイツァムナへの献血によって証明されたので、残るは、たとえどれほど些細なものであれ、魂の奥に潜む卑俗さのすべてを祈りと瞑想によって浄化することだけだった。かくして彼は生涯もっとも厳粛なとき、公式に国王としての聖別式に臨む準備が整ったのである。

起床後、ホロン・チャンは沐浴し、再び庶民の着る腰帯を身に纏い——まだ彼が至高の地位に就いていないということの印しである——議会議室に移った。ここに、この国のあらゆる貴顕紳士たち、すなわちマヤ族が崇敬する様々の神々を祀る高位の僧侶・神官たち、従属する町村の首長たち、収税人、代議士、役人等々が、晴着を着て集まっていた——壮麗な羽飾りのマント、絢爛豪華な羽毛をあしらった兜の前立て^{バナーシュ}、鹿革のマント、重いネックレス、ペンダント、耳栓、翡翠の腕飾りや足首の飾り——各人各様、最大限に意匠を凝らした盛装なのであった。まだ暁を迎えるには時間があつたので、裸体の男奴隷らが両手に点灯した松脂の松明をかざして議場の両側に立っており、この光が時折これら貴顕紳士たちの顔を照らし出していた。王宮前のテラスの外に、木製の長い太鼓、鈴^{ラットルズ}、フラジオレットを抱えた楽人が集まっていた。

イツァムナ神殿の屋根の一番高い場所に神官が一人立ち上がって、曙光の兆しを捉えようと地平線を透かし見ていた。暁が近付くと、群集はちょっとざわついて一斉にその目を王宮の入り口へ向けた。短い棒を抱えた奴隷が群集を掻き分けて通路を作り、その両側に並んで隙間を保った。突然、頭上から誰かの叫び声が響いた。「見よ！ 日神のお出ましじゃ！」楽隊がさっと立ち上がり、整然とテラスの階段を降りて広場へと行進した。初めに帚を持った寺男たちが通路を掃き、ついで香炉を振りながら別の若者たちがこれに続くと、芳香を含んだ大きな黒い煙りの環が上方へと登って行った。次に白衣を纏った神殿付きの合唱団が、日神への讃歌を唱いながら現れた。それから綿布を重ねて刺し縫いした甲冑で身を固め、石の鎌を切っ先に付け

14) サボテ Sapotes (zapotes). [(1) サボジラ, チューインガムノキ。熱帯アメリカ原産。樹液からガムの原料 chicle を採る。(2) サボジラの実] (桑名他『西和中辞典』小学館, 1997年)。ここでは (2) の意であろう。

た槍と、皮革の盾で武装した衛兵たち。これらに続いて近隣の属国の首長たち、さらにこの国の高官たち、彼らの豪華な羽飾りのマントはこれらの行列に最も派手な彩りを添えていた。このあと、イツァムナの神官の中で低い階級のものが、白衣の長い縦列を作ってゆっくりと前進した。

さて、アフクイトクが高位の神官らに囲まれた王宮を離れようとしていた。その両肩に吊るされた豪華な羽飾りのマントが、体を覆うジャガーの毛皮の上に掛かるほど、素晴らしく壮麗な衣装を身に纏っていた。芸術品ともいえるほど見事に人間の頭の形に彫られた、翡翠のネックレスは前後左右に揺れて、両肩にも触れたりした。王家の象徴でもある、ケツァル¹⁵⁾の繊細で、巻き毛のような羽毛が、その一族、チャン家の守護神たる、蛇の頭の形に彫り込まれた、鮮やかな色彩の木製の兜から垂れ下がっていた。実際彼は、古い時代からの慣行として、国王のみが身につけるべし、^{インセンサー}と言ひ伝えられている双頭の儀式棒¹⁶⁾は除いて、為政者の標章すべてを身につけていたのである。最後に、その名誉を称えんとしてすべての人々が集ってきた、粗末な身なりの十七歳の若者がこの後に続いた。

行列は、ゆっくりと広場をよぎって、上方に見えるイツァムナ聖堂の険しい階段を登っていく。楽隊、清掃夫、香炉持ち、合唱隊の面々が、折からの朝日に染まりながら、ピラミッドの頂上にある、この聖廟の入口の両側に整列した。最上段から最下段まで階段の両側に兵士が二重の非常線をなして警戒に当たっていたが、その間をさらに行列が進み、最上部に来て二つに分かれ、入口の両側に並んだ。アフクイトクでさえ、この入口で甥の到着を待っていた。少年が漸く頂上に達するとその手を取り、中へと先導して、最高位の役人、神官のみがこのあとに続いた。

この聖堂における儀式は昼の間中続くのであるが、もはや目にすることのできるものは何もうなくなったために、群集は散らばっていき、午後の終わりまでは姿を見せないであろう。この

15) ケツァル quetzal (学名 *Pharomachrus mocinno*)。 「キヌパネドリの一種で、ナワトル語でケツァリ quetzalli、マヤ語で kuk といい、そのきらびやかな羽毛のために非常に尊ばれた。ケツァルは熱帯雨林の標高900～1200メートルあたりに見られる雲霧林という森に棲息する。…雄も雌も色あざやかで美しく、翼・尾・羽冠には青緑色の羽根、胸には緋色の羽毛が生えているが、メソアメリカで最も価値ある鳥という地位を不動のものにしたのは、雄の尾羽のきらめくような美しさ、そしてその長さ―時には1メートルにもなる―であった。エリート^{インセンサー}の服や儀礼衣装に用いられたケツァルの羽根は、貢納品として非常に珍重された」(メアリ・ミラー／カール・タウベ118)。現在グアテマラでは国鳥に指定されている。

16) 双頭の儀式棒 the Double-headed Ceremonial Bar. 「儀式棒はマヤの支配者が持つ棒で、通例身体と交差するように両手に握られている。暦上の周期の終了時に使われることが多かった。一番伝統的な形の儀式棒は、両端が大きく開けたヘビの口になっており、その口から神 K、チャック、地底世界のジャガー神、神 N などの神々が出てきている。棒の胴体部には、交差した帯、マットのモチーフ、空の帯、瀉血を示す結び目その他のモチーフが描かれている。この棒は空そのものを象徴したとみられ、まるで支配者が空を手の中に握っているという意味を明示するかのようである。儀式棒はマヤの支配者が世界の秩序を支え、神々に差し出すうえで果たす重要な役割の象徴なのである」(メアリ・ミラー／カール・タウベ104-5)。

国の高官すべてが寺院外の廊下に集まったとき、依然甥の手を引いて先導していた**アフクイトク**は聖廟を守る緞帳に近づくと、さっとこれを引き離し、少年に中に入るようにという動作をした。**ホロン・チャン**が中に入り緞帳が元通り閉じると、**アフクイトク**は外の戸口に蹲り、その他の人々も同じ姿勢でこの部屋の周りにしゃがみ込んだ。

緞帳の外の人々にとっても、中にいる飢餓と疲労に苛まれた少年にとっても長く、退屈な^{ヴェジル}勤行がこれから続くのである。聖堂内の祈願者の奉献を妨げないようにという規則によって会話が禁じられていたから、時は途端に足取りを重くし、時間は淀み遅々として流れを止めたかと思えた。

ホロン・チャンは昼間、香炉にお香の球を継ぎ足すときと、扉の傍の水桶から水を汲み喉の渇きを癒すときのみを除いて、ひたすら聖廟のこの薄暗がりの中で父なる**イツァムナ**に祈りを捧げた。余りにも長く断食を続けていたので、頭がクラクラして、時折木像の神が自分に微笑みを送ってきて、指示を乞う彼の祈りに答えて助言を与えて呉れた、と思ったほどだったし、少なくとも日が暮れる一時間前に、叙任式のために彼をつれにきた叔父にはそう話したのである。しかし肉体の脆さと、空腹からくる幻覚に関して知悉している、この賢い老人は聡明にもただ鎮くのみで、より詳細な事情を話すように急かしたりすることはなかった。

外の廊下では誰もが、この大きな^{ドラマ}劇の最終幕がついに上がる時が来たことでそわそわと落ち着きを失っていた。**ホロン・チャン**が聖堂から足を踏み出した瞬間、全員が平伏して恭順の意を示した。僧侶が一人、前に進みでて彼、**チャン**の両足、両腕、上半身を赤い顔料で塗り、同じく赤い色の分厚い帯を巻いて両目を塞ぎ、さらに両の頬にも大きく赤くこの顔料を塗り足したのである。粗末な腰帯はもう脱いでしまい、代わりに腰の周りには刺繍入りの厚いものが一重に巻かれていた。それから翡翠の足首飾りや腕飾りがそれぞれの位置に、また同じ材料からなる大きな首飾りが首から揺れていた。これは人間の顔が見事に彫られた四個の大きな翡翠の^{メダリオンズ}円形浮彫りという豪華な装飾品で、一つは体の正面に、二つ目は背後、また両肩からも一つずつ下げられていたが、より小さめの翡翠に彫られた人面が、房に繋がれ幾つか首から掛かっていた。正方形の翡翠の耳栓が両耳の窪みに埋め込まれ、翡翠の指輪が、指に嵌め込まれていた。実際これらは国宝級の翡翠であり、この国の王家の者が、代々その身を飾るために蒐集してきた貴重な宝玉だったのである。

黒の薔薇状斑紋入りの、黄褐色に近いオレンジ色の壮麗なジャガーの毛皮が両肩に掛かり、長い尾が地面で引き摺られていた。遂にあの蛇の王冠が彼の頭に載った。これは口を大きく開けた蛇の頭を彫った^{シーダー}杉の装飾品だった。頭は鮮やかな緑色に塗られ、口は赤に、両目は磨きたてた漆黒の二個の黒耀石で作られたもので、歯には数個の白い貝殻が嵌め込まれていた。この蛇の頭から夥しいケツアルの羽が逆立っていたが、尻尾の羽毛は、寒い山岳地帯から遙か南の地方までに至る何百種類にも及ぶ稀少な鳥類のもので、艱難辛苦の末に手に入れたものであっ

た。これらの繊細な羽毛の蔓が少年の背に流れ、夕方の微風に吹かれて体の周りに渦巻き、半透明な緑の霧で彼の体を包んでいるのであった。

日没の時間がいよいよ迫ってきた。頭上の寺院の屋上に上がった例の僧侶が叫び、日輪が地平線に近づいたことを知らせた。大広場と周囲のテラスはこの間、人、人、人…の波。どのピラミッドを見てもその階段や、頂上には観客が鈴生り状態になっていた。神官たちが、記念碑を取り巻く茅葺きの塀の周りに並んで日の入りの瞬間に段幕を切り落とすべく待機していた。まことに**ホロン・チャン**を除くこの国の高官のすべてが——**アフクイトク・チャン**も含めて——神殿から出て、門の両側に整列した。**アフクイトク・チャン**の前に神官が二人、極彩色の木製の棒を支えて立っていた。一方の端には**日神**を、他方には**雨の神**が彫られ、棒全体は緑の羽毛で飾られている。これが**双頭の儀式棒**で、この国の至高の権威の象徴であり、国王のみが持ち運ぶことができた。**アフクイトク**でさえも摂政の期間に、この至高の地位の標章を用いることは決してなかったのである。

拍手喝采の嵐が下の群集から起こった。ピラミッドの頂上から歓迎の意をこめた太鼓が轟いた。同時に記念碑の周囲をめぐる草の塀が地面に叩き落とされると、太陽の最後の光が碑の表面に当たり、彫刻の細部までが照らされて露わになった。民衆の視線は上から下へ、頭上の支配者の顔から、いま明らかになったばかりの、石の矢の表面に彫り込まれた、その好一對の顔へと、何度も往き来した。大きな歓声が続いた。**イツァムナ**と**ユム・カアシュ**に選ばれしもの、彼らの不毛の畠に実りを取り戻してくれる少年が、ついに国王たることを宣言されたのである。**アフクイトク・チャン**は傍らに立つ神官から**儀式棒**を受け取り、甥に近付くとその真直ぐ延ばされた両腕と水平にそれを置いた。「万歳、**アフホロン・チャン**、**アフメクト・チャン**の息子よ！ 汝に**ティカル**国王としての地位を授ける。偉大なる**イツァムナ**のご加護がありますように、さらにまた、汝の人民にも、永遠の繁栄が約束されますように！」

ああ、もはや一人の少年ではなく、成人の呼称（成人男性を示す接頭語**アフ**）を得た**アフホロン・チャン**は、ピラミッドの端に進み、**儀式棒**を掲げて群集の歓呼の声を制止した。深い沈黙が彼らの上に落ちた。

「おお、わが民よ、同胞よ！^{はらから} 今この瞬間から爾後、天に在ますわが父、偉大なる**イツァムナ**がわれを召されるその日まで、わが唯一の目的にして、わが唯一の思いは、汝らの幸福にあらんことを！ **生命の神**よ、我らがこの国難^{さなか}の最中にわれを導き賜わんことを！ わが民を正しく、かつ善良に治める力をわれに与え賜え！ なかんずく、われらが衰えし田畑に繁^{でんばた}栄と^{大いなるさち}豊^{ゆたかなるとみ}富^{とみ}をふたたび降されんことを！ おおわが民よ、同胞よ、わが厳粛にして聖なるこの誓いを、汝らへの献身の証しとして受け入れよ！」

日輪はいま没したばかり、その薔薇色の残光がこの世ならぬ光で少年の体を包んでいた。眼下の広場に群がる何千という人々は呼吸も止めて、あたかも**生命の神**によって彼らの新王と、

彼がかくも熱烈に求めたほかならぬその叡智とが、一つに溶け合うのをその目で見たと、思った。深い静寂^{しじま}が辺りを占めた。みるまに黄昏が広がってきた。空に星が瞬き始めた。闇が次第に濃くなってきて遂に少年は、群集に背を向けて神殿の中に消えて行った。ここに人々の団塊はようやく崩れ、広場はいつしか無人となった……

シルバヌス・G. モーレイ¹⁷⁾

参考文献：

1. 和文のもの

大井邦彦「ティカル」『世界大百科事典19』平凡社、1990年、29.

桑名一博他『西和中辞典』小学館、1997年

増田義郎「ティカル」『日本大百科全書16』小学館、1995年、32.

ミラー、メアリ／タウベ、カール『マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義監修・武井摩利訳、東洋書林、2000年.

八杉佳穂『マヤ文字を解く』中央公論社刊、1982年

——「マヤ暦に太陽暦はあるかー暦の謎をめぐってー」『国際交流99』独立行政法人国際交流基金、2003年4月、80-84.

2. 英文のもの

Miller, Mary / Taube, Karl. (ed.) *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of An Ancient Mexico and The Maya*, Thames and Hudson Ltd, London, 1993.

Wickerman, John M. *Myths and Legends of the World*, vol. 3, Macmillan Reference USA / AN Imprint of The Gale Group, New York, 2000.

付記：本稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著／神徳昭甫訳「北米インディアン¹⁷⁾の生活（6）」－23部族の伝承と習慣『富山大学人文学部紀要』第38号（2003年3月）の続編である。

なお、マヤの暦法およびマヤ語に関して、民族学博物館教授八杉佳穂氏に色々ご教示賜った。厚く御礼申し上げる。

17) S.G. Morley. アメリカの文化人類学者で原著の執筆者。生没年は不明。以下四編の論文がある。
The correlation of Maya and Christian chronology (*American Journal of Archaeology*, 2nd series, vol. XIV. PP. 193-204.)
The historical value of the Books of Chilam Balam (*American Journal of Archaeology*, 2nd series, vol. XV, PP. 195-214.)
An introduction to the study of the Maya hieroglyphs, (*Bulletin* 57, Bureau of American Ethnology, 1915.)
The inscription of Copan, (Carnegie Institution, 1920.)